

北川勝彦・北原聡・西村雄志・
熊谷幸久・柏原宏紀編

『概説世界経済史』

昭和堂 2017年 v + 291 ページ

あみ なか あき よ
網 中 昭 世

本書は、経済史を学ぶ初学者を対象として、各地域固有の経済史と同時に、理論的発展の過程と最新の論争を垣間見ることができるコンパクトなテキストである。この著作は、関西大学経済学部で経済史を担当する学内外の教員によるプロジェクトから生まれたものである。普段の講義を彷彿とさせる語り口（たとえば情報を「ねた」と表現する）は読者との距離を一気に縮めている。

本書の本文は3部から構成されている。第1部では、経済学・経済史を学ぶ醍醐味を説き、第2部でその面白さを披露すべく、地域横断的な主要テーマを立て、通時的に理論と方法、課題を提示している。第2部が地域横断的テーマを設定したのに対して、第3部（第3～6章）では、日本、ヨーロッパ、アジア、アフリカと各地域の経済の歴史へと展開している。第3部の各章の末尾には、参考文献の他に新書を中心とした読書案内のコーナーが設けられている。そして最後には共通項目の索引が付けられている。

本書の魅力のひとつは、直近の論争まで含めたレビューにある。たとえば、2000年にケネス・ポメランツが刊行した *The Great Divergence: China, Europe, and the Making of the Modern World Economy*（川北稔監訳『大分岐——中国、ヨーロッパ、そして近代世界経済の形成——』2015年）以降のグローバル・ヒストリーをめぐる議論である（66～71ページ）。ポメランツはヨーロッパ中心史観を批判し、経済制度、人口動態、プロト工業化の発達状況や資本主義の形、家内労働の役割とジェンダー規範、資本蓄積や技術革新の影響、消費行動といった幅広い研究成果を駆使して、ヨーロッパと東アジアの中核地域を比較した。そして、前者の優位性を否定する問題提起を行った議論の火付け役である。

本書では、ポメランツの研究に対して補強・修正を迫るべく、世界各地の長期的な実質賃金や生活水

準の動態を明らかにする研究が紹介されている。折しも2017年の日本の政治経済学・経済史学会でも「グローバル経済史にジェンダー視点を接続する」と題したパネルが設定されており、本書はこうした現在進行形の議論を位置づけるのに打ってつけである。

さて、世界経済史の入門書の役割を、折々の議論を時間的、空間的に大きな枠組みの中に位置づける水先案内人とするならば、その要のひとつは全方位的なバランスだろう。こうした観点から、本書の課題について3点指摘したい。

第1に、理論・地域経済史の両面で対象地域からラテンアメリカ地域が欠落している点である。本書においてラテンアメリカ地域は、イギリス経済史の文脈で言及されるのみである。しかし、たとえば抽象的な一般理論を志向するイギリス古典派経済学に対する批判として、実証を重視するドイツ歴史学派が誕生したように、地域固有の経験は新たな議論を生み出す豊かな土壌となってきたはずである。

第2に、各地域の経済史を捉えるタイムスパンの大きな差である。本書で設定された各地域史の起点は、日本が江戸時代、ヨーロッパが中世、アジアが16世紀、アフリカが19世紀となっている。この時間軸の設定は、第3の点にも影響を及ぼしているものと思われる。

その第3の点は、共通項目の索引の役割についてである。たとえば、索引で「金本位制」の項目についてみると13カ所、本書が対象とする全地域に及ぶ。その一方で、共時的な地域比較が期待できる「世界恐慌」の項目はなかった。経済活動を通じて同時代の世界がどのように連動していたのか、あるいは連鎖を断つべく独自の経済の在り方をどのように模索したのか。そうした探求を促す仕掛けとして、索引は幅広い可能性をもつ。

一読して、本書の索引に見いだせなかった仕掛けは、実際には執筆者らの日常的な講義の中に織り込まれているのではないかと推察した。末尾の追記には、本書がテキストの性格上、改訂を加え続けていくべきものであると記されている。ぜひ改訂の際には、持ち味である講義の臨場感を存分に盛り込んでいただきたい。

（アジア経済研究所地域研究センター）